

現状と展望をさぐる

「新学習指導要領」 実施後の「今」

新学習指導要領の完全実施からしばらく経ちましたが、実際の学校現場ではどんな変化が起こっているのでしょうか。また、新学習指導要領のねらいをより深化させるために教師はどんなことに留意していけばよいのでしょうか。新学習指導要領の策定にもあたられた早稲田大学教授の安彦忠彦先生と、多くの小学校現場の実状に詳しい授業インストラクターの鍋木良夫先生に、それぞれのお立場からお話をうかがいました。

取材 | 金丸教子

先生たちの中には「“習得”や“活用”ってどういうこと？」という
悩みや戸惑いがあります。

— 鍋木先生

「習得」と「探究」の間を
つなぐのが「活用」

安彦 小学校では平成23年4月から新学習指導要領が完全実施になりました。現場での浸透状況はどうですか？

鍋木 「活用」が大事であること、基盤となる知識や技能を確実に「習得」させることに重点を置くべきであるということとは、どの先生も理解していると思います。

しかし、実践となると、まだまだではないでしょうか。教科書もかなり発見学習的に編集されている印象が強く、先生方の「知識を教える」ことが苦手というスキルの問題とあいまって、従来のように子どもたちの「気づき」をぎりぎりまで求めてしまうところがあります。

安彦 若い先生は、子どもに教えることをせずに、気づかせることに目が向く。一方、ベテランの先生は、やや余計に教え込む感じになる、ということでしょうか。そんな両者のバランスを取る必要があるというのが、今度の新学習指導要領の趣旨なので、互いによいところを取り入れ、学び合ってもらいたいと思います。

鍋木 新学習指導要領になっても、授業の仕方がそう簡単に変わらないのは、先生たちの中に「習得」や「活用」って、具体的にどういうこと？という悩みや戸惑いがあるからかもしれません。

安彦 中央教育審議会では、「習得」と「探究」の間をつなぐために「活用」という学習を考えました。それは、これまでの

ように知識や技能をただ習得させただけでは、「総合的な学習の時間」の探究的な活動にうまくつながっていないことがわかったからです。「活用型」の授業の最終のねらいは、「総合的な学習の時間」や発展的な学習における探究的能力を育てることです。

鍋木 それを簡略に示したのが、2ページの図ですね。(図)

安彦 教育の最終的な目標である「探究」の力や思考力を育てるために、まず各教科の基礎知識をしっかりと教える。次の段階で、それを少しでも「探究」につなげるために、活用型の授業を行う。そうすると、「総合的な学習の時間」や発展的な学習で、子どもがその力を使って活動できるようにする、という流れです。

教科の中で行う「習得」と「活用」は決して別々に成り立っているのではなく、「探究」の質を高めるためには「習得」がしっかりしていないといけません。「活用」の過程において、副次的には「習得」のほうも強まるかもしれませんが、一番のねらいは「探究」です。いくら「習得」に力を入れても、「探究」にまでつながらなければ意味がないと思います。

鍋木 「活用」を意識した授業をして初めて、確かな知識が「習得」できるし、「活用」することで子どもが新たな発見をし、それが新しい知識の「習得」につながる可能性もあります。その意味で「活用」は非常に重要ですね。



PROFILE

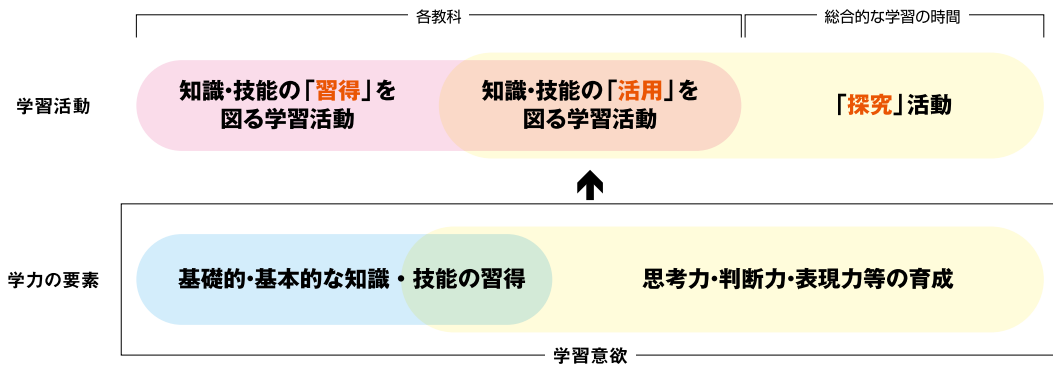
⑤ 安彦 忠彦 先生 Tadahiko Abiko

早稲田大学教育学部教授。中央教育審議会委員、「児童生徒の学習評価の在り方に関するワーキンググループ」委員。専攻はカリキュラム論。著書は「改訂版教育課程編成論」(放送大学教育振興会)、「教育」の常識・非常識(学文社)、「公立学校はどう変わるのか」(教育出版)など多数。

⑥ 錦木 良夫 先生 Yoshio Kaburagi

全国各地の小中学校で授業指導や講演を行う授業インストラクター。小学校教諭時代に磨いた理科の授業スキルや小中学校の校長を務めた経験を生かして後進の指導にあたった。先に教える「先行学習」を提唱し、その普及に努めている。著者は、共著である「教えて考えさせる授業 小学校—新学習指導要領対応(新版)」(図書文化社)ほか多数。

図●新学習指導要領における学習活動のあり方



先生たちは「絶対に正しい答え」を求めようとしますが、
まずはだいたいの基準を定め、状況に応じて改善していけばよいのです。

——安彦先生

教科で学ぶ基礎を他の場面で
使えるようにするのが「活用型」

錦木 「習得」も「活用」も教科の中で
行うものですが、展開の仕方の例を少し
挙げていただけますか？

安彦 「活用」というのは、「探究」のモ
デルとなる活動です。例えば、社会科で
地図の方位と縮尺を学習したら、その後
で、学校や家の周りの地図を描かせ、方
位と縮尺が入っているかをチェックし、

それが必要なことを教える。このように、
授業で学んだことを、他の場面で一つで
も使わせる学習するのが「活用」です。

ある先生は、雑誌で、算数のグラフの
例を挙げていました。表から数字を取っ
てきてグラフを作る作業するのが「習
得型」の学習。たいていはここで終わっ
てしまいます。これを「総合的な学習の
時間」につなげるには、グラフの横軸を
倍にさせたり、半分にさせたりして、「グ
ラフには変化や増減を一目瞭然にし、イ
ンパクトを強くする効果がある」ことを
子どもたちに意識させなければいけませ
ん。これが「活用」です。ここまでやっ
ておけば、「総合的な学習の時間」や発
展的な学習につながっていきます。

錦木 「活用」には、教科の中で行う「活
用Ⅰ」、言い換えれば「活用Ⅰ」と、「総合
的な学習の時間」に行うもの、即ち「活
用Ⅱ」があると考えるとわかりやすいか
もしれません。

安彦 「活用Ⅰ」は基本的に、そのとき
勉強している教科の知識を、「活用Ⅱ」

は自分たちの問題に関わる題材を自由に
使ってもよいことになっています。

「活用型」という場合の「活用」は前
者で、そのとき勉強している教科の知識
を使います。しかし、教えたことを何も
かも活用させる必要はありません。教師
は、いずれ「総合的な学習の時間」や発
展的な学習に使うものだという視点を
持って、何を活用させるかを決めること
が大切です。

錦木 教師には、先を見ながら何を活用
させるかを選ぶ力が求められますね。

安彦 そうです。でも、それは決して難
しいことではありません。活用させるべ
きことは、例えば、「地図には方位や縮
尺が欠かせない」というような、必要不
可欠な知識・技能です。全教科について
一人で決めるのは難しいかもしれませんが、
他の先生方と話し合えば、活用する
ものはだいたい決まってくるでしょう。

私は、そのような「活用させるべき基
本」は、各教科20〜30項目程度だと考え
ます。まずは、それを暫定的でよいので
決めてください。

先生たちは「絶対に正しい答え」を求
めようと思いますが、まずはだいたいの基
準を定め、状況に応じて改善していけば
よいのです。

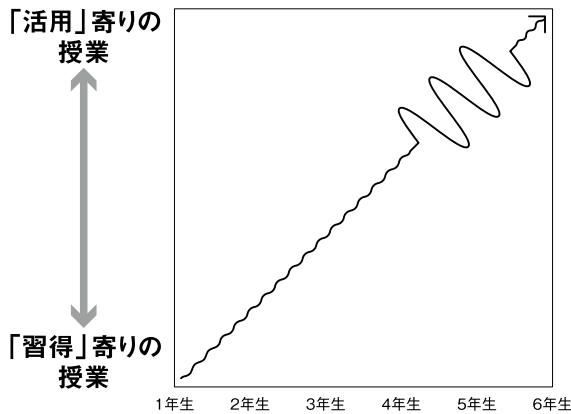
錦木 新学習指導要領も、時代によって
柔軟に変わってきました。それと同じよ
うに、何を活用するかも、柔軟に決めて
いけばよいのですね。

発達段階に合わせた指導をすれば、 子どもは、先生方が悩む必要がないくらい、 どんどん自分から習得していきます。

——安彦先生



グラフ●子どもの発達段階と学習活動



- 学習の比重は、1年生が最も「習得」>「活用」、6年生が最も「習得」<「活用」となる。
- 4・5年生が過渡期で「習得」と「活用」の間を往復しながら学ぶ。



子どもの発達段階に合わせて 「習得」と「活用」の割合を変える

安彦 もう一つ、「習得」と「活用」について言うと、先生方には子どもの発達段階を覚えてもらいたいですね。知識や技能の「習得」については低学年の子どもは嫌がらないはずなので、ドリルなり練習問題なりで、徹底的かつ重点的に習得させてほしいと思います。ただ、その中にゲーム性を取り入れるなど、楽しさをうまく加味させる工夫が必要です。特に「技能」においては十分に習得させなければなりません。

しかしながら、現在はまだ、子どもの発達段階や特性に合わせた指導が十分になされていないように感じます。例えば、文字を汚く書いてもOKにする先生がいますね。でも、きれいに書いたほうがほめられるべきだし、どんな字が読みやすくなるかわかりやすいか、子どもたちも見ればわかるはずですよ。文字をきれいに書くことの意味をわからせ、書かせる工夫が必要だと思っています。

鏑木 子どもの発達をふまえて、1年生は「習得」に重きを置き、学年が上がるにつれて「活用」の割合が上がるという考え方が必要ですね。(上のグラフ)

安彦 低学年は「習得」に力を入れても何ら問題がない。子どもは、楽しくできることは喜んでやります。その時期に徹底して基礎的なものを入れていけば、高学年では「活用」に対しても楽しんで取り組めるはずです。

「活用」は「探究」にもつながりますが、同時に「習得」を強める働きもあります。例えば算数では、活用していく中で、計算間違い・読み間違い・書き間違いが正されていく。そういう効果も間接的に生まれるのです。くり返しになりますが、「活用」はあくまでも「探究」につながるためのものなので、高学年では、「習得」を目的にするものは少なくしてもよいのです。

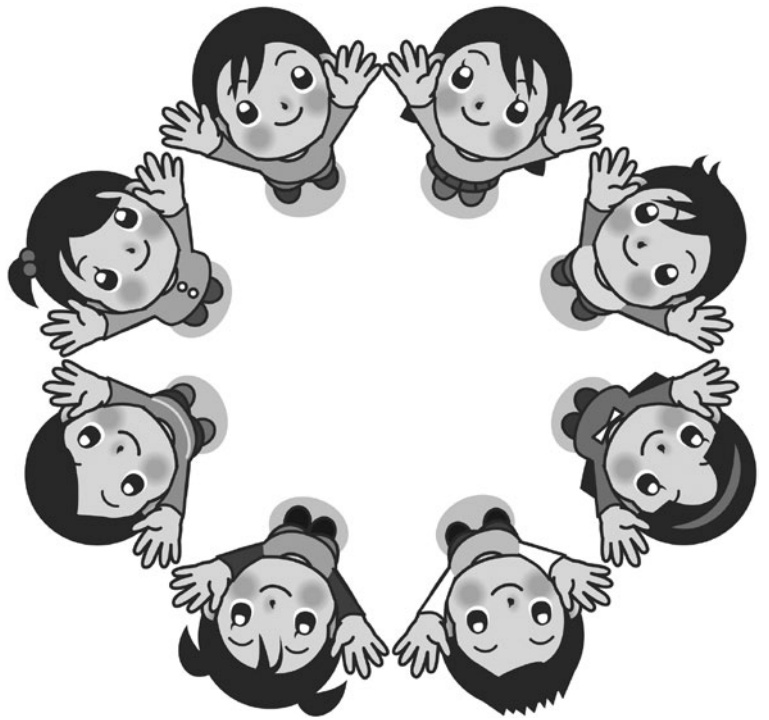
鏑木 なるほど、発達段階と「習得」「活用」との関係がよくわかりました。

しかし、正直に言うと、教師の中にはまだ「探究」を意識した「活用」という視点が意識されていないように思います。安彦 「活用」の段階を目的にして終わっているのです。私は、それが問題だと思っているのです。ですから、「総合的な学習の時間」の学習がどの教科の知識の活用とどう関連するのか、関連図を作ってみてほしいですね。そのことが、先ほど申し上げた「教科で教えられない」とは何でも活用するわけではない」ということに絡んできます。

鏑木 学校現場は、そういう視点を忘れてたまま、「活用」のほうだけに目がいつています。また、「習得」についても、どういう手立てを講じれば、より効果的に定着させられるかで悩んでいます。

安彦 それも、子どもの発達段階を意識していないことに理由があります。発達段階に合わせた指導をすれば、子どもは、先生方が悩む必要がないくらい、どんどん自分から習得していきます。ベテラン

「新学習指導要領」 実施後の「今」



私は子どもたちが小学校のうちに、「**「わかる」とはこういうことなのか**」という実感を一度でも味わってほしいと思っています。

—— 鈴木先生

の先生の実践を見てみると、そのような指導がうまいなあと思います。

私の見た例では、音楽を使って九九を教えていました。歌と踊りを使って身体で覚えていく。外国の先生に見せたら、目を丸くして感心していましたよ。そういう工夫をもっとやっていけばいいと思います。

「何のために教えるか」 全体を見渡すことが重要

安彦 先日、コンサルタント会社の人をゲストスピーカーとして呼びびし、講義をしてもらったのですが、「今は、多くの人が目の前の仕事をこなすことに精一杯になっている」と指摘していました。

鈴木 それは教師も同じですね。目の前にあるものしか見えず、「何のために」という全体像が見えていないように思えます。

例えば、算数のあるページで活用課題を選ぶときに、最後のページをめくるという発想がない。「章末問題を見てもいいし、他社の教科書を見てもいい、そこにヒントがあるのだから」と言っても、今教えているページの範囲を超えてはいけないと思ってしまうんです。6割から7割の先生がそういう固定観念をもっています。だからこそ、ここでもう一度、「習得」・「活用」・「探究」の関係を見直すべきというメッセージが必要ですね。

安彦 これまでは、考える力や探究的な能力を「総合的な学習の時間」だけで達成しようとしていました。しかしこれか

らは、教科の力も借りて目的を達成していこうとしているんだというように、意識を変えてもらいたい。今回「総合的な学習の時間」の時数を減らし、教科の時数を増やしたのには、そういう意図もこめられています。

「習得」や「活用」を「探究」につなげるというのは、まさにそういう意味です。「探究」につなげて初めて花が開きます。

これから育っていく 子どもたちへの願い

鈴木 私は子どもたちが小学校のうちに、「わかる」とはこういうことなのか」という実感を一度でも味わってほしいと思います。「わかる」楽しさを実感したら、子どもたちは自分で走り出すし、それが新学習指導要領のいう「生きる力」を育むことになるはずですよ。

安彦 小学生の段階では「よく学び、よく遊べ」でよいと思います。ただ、「考えること」を嫌がらない子どもであってほしいですね。中央教育審議会でも話なのですが、子どもたちは国の未来の主権者になるのだから、先生方は子どもたちにそういう自覚と責任意識をもたせ、必要な力を身につけさせてもらいたいと思います。

鈴木 日本の未来を担う子どもたちのため、現場はもう一度、「習得」・「活用」・「探究」の関係を見直すべきだと痛感しました。

本日はありがとうございました。

参考にしたい、「習得」&「活用」実践例

安彦先生と鍋木先生の対談の内容を受け、ここでは、現場の先生にご執筆いただいた「習得」と「活用」の実践例と、授業を成功させるためのポイントについて紹介します。今後の授業や指導にお役立てください。

▶「習得」実践例(算数)

学習の重点の「共書き」で「習得」を確実にする

鳥取県八頭町立八東小学校教諭 竹本 英子

「習得」を確実にするために、1時間の学習活動の中に「共書き」を取り入れています。

「共書き」は、1時間の学習の重点となる内容を、授業のはじめの段階で教師と子どもが同時に書く活動です。共書きの利点を、習得という観点から3つ挙げてみます。1年生の「とけい」の学習が例です。目標は、「何時、何時半」の時刻の読み方や作り方を理解させることです。

この時間の「共書き」は、次の通りです。太字の部分は、朱書きです。朱書きは、特に意識して書かせたい言葉です。

とけいの みじかいはりが
さす すうじは
なんじを あらわします。
ながいはりが **6**のとき、
なんじ **はん** といいます。



①学びの空間が生まれる

「習得」を確実にするためには、学習の場が大切です。教師と子どもが同時に書くことで、教室は鉛筆の音だけとなり、ほどよい緊張感が生まれます。1年生の子どもたちも、一体感の中で、あちこちへ気が散らずに集中して授業に向かいます。

②1時間の授業の重点が明確になる

時計の読み方や作り方を1時間のはじめに知るので、1時間を通して学習の重点を確かめながら学ぶことができます。問題を解く時には、「短い針が指す数字が、何時」と、「共書き」に戻って考えています。自分が学ぶ内容を焦点化することができるのです。発言の中に、「長い針が6のときは半だから…」というように、「共書き」の言葉が説明の中で使われ、ぶれない習得に向かえます。

③子どもが自分の理解を振り返ったり、整理したりできる

子どもたちは、学習前から時刻について漠然とわかったと感じていました。しかし、「共書き」をしながら、もう一度、自分の理解を見つめ直すことになります。例えば、「6のとき」と書きながら、「5でも7でもなく、6のときが半」だということを、はっきりとさせていきます。言葉として書くことで、その意味を具体的にイメージして受け取り、自分のもっている知識と比較したり関連づけたりしていくのです。

「共書き」は、1時間の授業の学びの軸となり、習得させる内容そのものと言えます。

鍋木先生がアドバイス！
授業力をアップするための
スキルとコツ

教師が思い描く理想の授業を実現するには、確かな指導のスキルを磨いておくことも大切です。鍋木先生に、そのいくつかを教えてくださいました。

▼どんな授業か、ひと目でわかる板書を

授業では、板書が全ての基本と言っても過言ではありません。あれこれたくさん書きたくなりますが、1枚に収めるのが基本です。3つの意見が出たからといって、それを全部書いていては、書く場所が足りなくなってしまう。授業で何をやっているかが、板書を見ればすぐに理解できるように、内容を吟味した板書を書きましょう。

▼机間巡視の目的を考えよう

課題などをやらせているとき、机間巡視をすることも多いと思います。しかし、これが単なる「散歩」になっていないでしょうか。

机間巡視は、子どもが授業についてきているか、つまづいているところはないか、指示された行動がとれているかを確認し、個別に対応することで、授業をよりよく展開するために行うものです。この基本的な動作ができていないかどうか、振り返ってみてください。

▼子どもの指名をするときは

子どもを指名する際は、単なる「はい、

「新学習指導要領」 実施後の「今」

▶「活用」実践例(算数)

確かな「習得」に基づいた 「活用」の授業

福島県郡山市立守山小学校教諭 木戸 裕治

私は「習得」した知識や技能が子どもたちに共有されている状況において、「活用」を通して学習内容の理解を深めることができると考え、取り組んでいます。「活用」する場面においては、主に次の視点で問題を作成しています。

- ①子どもが既習経験や「習得」した知識とのズレを感じ、「あれ？」と疑問に思ふようなもの。
- ②「習得」した知識を整理し、用いるようなもの。
- ③「習得」した知識や技能などの内容を、別の視点から捉え直すもの。

具体的にこの視点で作成した例と、それによる子どもの様子をまとめると次のようになります。

①【6学年 単元：比】

比の意味と表し方、比の値について理解した上で、T君のお年玉20,000円とY君のお年玉30,000円の金額の比に当てはまるものを探す。

この活用では比の表し方はいくつもの方法があり、見た目は異なっても本質は同じであることを見出すことができた。

【習得した知識や技能】

- ・2:3のように表された割合が「比」であること。
- ・「:」の前の数を後ろの数で割った商を比の値とすること。

【活用で用いた問題】

T君2万円、Y君3万円のお年玉をもらいました。
T君とY君のお年玉の金額の比で当てはまる答えはどれ？

- ① 20000 : 30000
- ② 4000 : 6000
- ③ 2000 : 3000
- ④ 400 : 600
- ⑤ 200 : 300
- ⑥ 40 : 60
- ⑦ 20 : 30
- ⑧ 10 : 15
- ⑨ 4 : 6
- ⑩ 2 : 3

もとにする貨幣額	→	貨幣額
1円	→	1円
5円	→	5円
10円	→	10円
50円	→	50円
100円	→	100円
500円	→	500円
1000円	→	1000円
2000円	→	2000円
5000円	→	5000円
10000円	→	10000円

②【5学年 単元：平行四辺形と三角形の面積】

平行四辺形の面積の求め方について理解した上で、平行四辺形の底辺と高さを図の中から見つけ出し面積を求める。

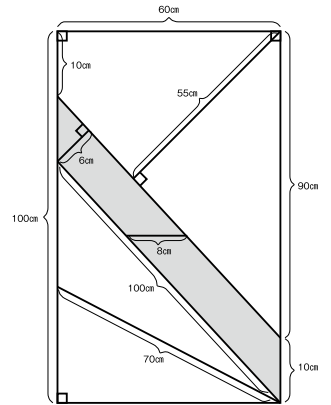
この活用では図の中に様々な長さの値が記されているも、習得した知識を活用すれば求積に必要な値を見出すことができ、面積を求めることができた。

【習得した知識や技能】

- ・平行四辺形の面積＝底辺×高さ
- ・底辺に対し垂直な関係にあるものが高さ
- ・高さは図の中にも図の外にもとることができるということ。

【活用で用いた問題】

- ・図の色で塗られている部分の面積を求める。



③【4学年 単元：小数のしくみを調べよう】

数量図をもとに1/100の位までの小数の書き方、読み方を理解した上で、数直線図を用いて1/100の位の数を読み取り、答えを求める。

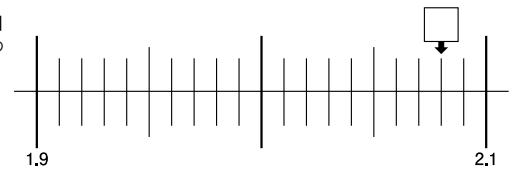
この活用では数量図の縦に数値を読み取る視点から、数直線の横に数値を読み取る視点に変わっても数を構成する考えは同じであり、「既習」の知識を活用して1/100の値についても正確に読み取るすることができた。

【習得した知識や技能】

- ・0.1ℓの1/10を0.01ℓと書き、「れい点れいーリットル」と読むこと。
- ・1.2ℓと0.08ℓをあわせたかさを、1.28ℓと書き「一点二八リットル」と読むこと。

【活用で用いた問題】

- ・数直線の中の□の値を求めること。



子どもの思考に沿った指導技術をもつことは、毎日授業をする教師にとって必須のことです。自立した学習者を育てるために、日々勉強していきましょう。

小学校だけでなく、中学校までの義務教育期間を見通したカリキュラムを知っておくと、どの項目がどの段階で登場するかがわかり、指導の仕方にもメリハリが生まれます。例えば、小学校でしか出てこないものと、中学校になってさらに発展的な内容を扱うものとは、おのずと教え方も変わってくるはずです。

▼中学校の学習内容を知れば、 より効果的な授業ができる

子どもから期待する意見が出たとき、教師はつい直感的に「そうだね」と反応してしまいます。しかしそれでは、子どもは「ああ、そうなんだ」と思うだけで、より深く考えようとはしません。期待する意見が出たときこそ、「こういう意見が出たよ。どうかね」と、他の子どもに投げかけてみましょう。それが、学びを深めることにつながります。

▼期待する意見が出たときの 反応がポイント

子どもから期待する意見が出たとき、「いいえ」で終わらせないような問いかけが大切です。もちろん、あえてそうさせる場合もありますが、特に基準もなく指名するのは避けたいものです。また、発言の多い子どもに授業に積極的に参加しているとは、必ずしも言えません。発言は少ないけれども熟考するタイプの子どもも存在します。そのことも考慮に入れましょう。